

Mwe シニア会会報

Mwe Senior Club

NEWS LETTER

No.23 2010年10月

目 次

巻頭言		柴富 昭洋氏	1
報告	「Mwe シニア会総会議事録」	井下 佳弘氏	2
報告	「ネパール・ヒマラヤ・タラキリ ゆっくり旅行」	小林 禧夫氏	6
寄稿	「ネパール・ワイレスネットワーク・プロジェクトセミナーに参加して」	柴富 昭洋氏	15
寄稿	「オーストリア／ドイツのオペラ旅行」	春日 義男氏	18
趣味悠々	「焼き物作り（陶芸）に目覚めて」	渡邊 邦夫氏	24
会社紹介	「株式会社 エクサテクノロジー」	鳥塚 英樹氏	29
自己紹介		高橋 弘氏	32
Mwe シニア会同好会の活動状況			
	ゴルフ同好会「第35回ゴルフ大会報告」		35
	「第36回ゴルフ大会報告」		
	「第37回ゴルフ大会報告」	奥野 清則氏	
役員一覧			表紙裏
会員名簿			裏表紙

Mwe シニア会

Mwe シニア会

平成 22 年度役員一覧（敬称略）

会長	堀 重和
副会長	柴富 明洋
幹事長	井下 佳弘
会計幹事	風神 裕
幹事	春日 義男
監事	松本 巖

運営委員（暫定：会計担当、同好会担当を除く）

編集担当：柴富 昭洋、高松 秀男、田中 淳
松永 誠

企画担当：井下 佳弘、

同好会活動担当：奥野 清則、平井 克己

ゴルフ同好会幹事：奥野 清則、松本 巖
平井 克己

囲碁同好会幹事：平井 克己、平野 裕
北爪 進

ホームページ担当：風神 裕、北爪 進、
三島 克彦、柴富 昭洋

活動活性化担当：（地方活動を含む）

紅林 秀都司、石田 修巳、
粟井 郁雄、片木 孝至
影山 隆雄

海外研修企画担当：小林 禱夫、泉 彰
高松 秀男

発行者 Mwe シニア会

発行責任者 堀 重和

事務局 〒225-0002

横浜市青葉区美しが丘 1-12-46

堀 重和

TEL/FAX： 045-902-8772

発行日： 2010 年 10 月 30 日

巻頭言

柴富 昭洋

前世紀から今世紀にかけて、社会や文化に最も変革を生じさせた物の一つとして IT システムの普及がある。身近な一例をあげると、e-mail や携帯電話がある。既に生活の隅々にまで浸透しており、文化生活を営む上でなくてはならない存在となっている。更に追い打ちをかけるように携帯情報端末としてアップル社より iPod が発売された。数多くの情報機器メーカーも遅れまじと多くの新製品を発表して追随している。このような IT システムを



基盤とする情報化社会を可能としたのは先人技術者達が開発した超多重マイクロ波通信技術と超多重光通信技術との基盤技術の貢献は甚大である。今年はレーザー開発 50 周年とかで、学会やシンポジウムで多くの催しが行われている。光通信技術の陰に隠れて、マイクロ波通信の技術は少し控え目である。しかし半導体レーザーが出現するまでは マイクロ波技術が メーザーを代表とするガスレーザー、固体レーザーの開発に多大の貢献をしたことは忘れられない。

最近、マイクロ波技術者の心を最も躍らせたのは、“はやぶさ” 衛星が 7 年の宇宙探査の末、小衛星“いとかわ” に着陸して、表面物質を採取したカプセルを地球に帰還させたことでした。あらためて日本の高度なマイクロ波による制御技術と衛星技術を世界に知らしめたことではないでしょうか。Mwe シニア会会員の中に オーストラリアの夜空に燃えながら帰還する衛星やカプセルの閃光に涙したのは一人や二人ではなかったようです。

Mwe シニア会会員相互の連絡、情報交換、親睦には 現在 e-mail や Mwe シニア会誌が使用されています。今後はこの IT 社会の中 Mwe シニア会ウェブサイトは今まで以上に積極的に利用、活用して会員相互の親睦をより深めて行く必要があると思います。Mwe シニア会のウェブサイト入口ページである HP(ホームページ)の更なる充実化をはかり、会員が容易にアクセス、利用する運用体制を早く確立して会員相互の親睦をより深めて行きたいと思います。今まで会員間の唯一の絆となっていた当 Mwe シニア会誌も印刷物から HP 掲載へと時代の流れに沿った変革を遂げて行きたいと考えております。会誌の HP 掲載にあたっては、個人情報管理の問題、著作権等 数々の問題点がありますが、会員の皆様のご理解とご了承のもとで進めてまいりたいと思います。

Mwe シニア会平成 22 年度年次総会議事録

井下 佳弘
Mwe シニア会幹事長

1. 年次総会開催

日時・場所：平成 22 年 6 月 11 日
15：30～17：00 東京芝メルク
出席者（敬称略）：赤田、井下、伊東、
上野、風神、北爪、紅林、佐藤、柴富、
高橋、高松、遠山、鳥塚、橋本、堀、
平井、三島、水品、本間、鈴木、木下、
渡邊 計 22 名
委任状：13 通 議決権計 35、57%にて
総会は成立



2. 平成 21 年度の総括——堀会長

- 1) イベント参加者の固定化が進んでいることへの危惧とその打開策提案要望
- 2) Mwe シニア会の持つ技術・経験の生かし方
- 3) APMC, MWE との親睦
- 4) WEB, Mail の活用と保有資産の有効活用等の提言がなされました。

3. 第 1 号議案

- 1) 平成 21 年度活動報告——井下幹事長 会の活性化、集いの場、会員動向、各分科会活動が報告された。
会員数については年会費未納者、休会会員、退会会員を整理し総数 60 名と報告したが篠原 己抜会員が退会されていないことを確認し、61 名と修正された。また今回の総会開催にあたり手紙による案内および返信はがきによる総会出欠を行い会員の最新連絡先、連絡方法および近況報告を把握し、当日総会資料として参加した会員に配布した。
- 2) 平成 22 年度計画——井下幹事長
行事：年 4 回のゴルフ大会、里山体験、APMC 後夜祭、新年会
運営委員会：12 月、5 月の二回開催
会誌：9 月、3 月の二回発行と同時に WEB 配信移行年度と位置付けた。
- 3) 会誌・HP 活動報告——柴富副会長
会誌：21 年度は 1 回に終わった事に対し 22 年度 2 回発行を計画
HP：久崎幹事より他の委員への移行画が提案され風神幹事、北爪、三島、

柴富委員で新規立上げを精力的に行うことが了承された。

- 4) 同好会活動報告——高松ゴルフ同好会委員、平井囲碁同好会幹事より
21年度活動報告および22年度計画が報告された。

4. 第2号議案 Mwe シニア会会則一部改訂提案——柴富副会長

- 1) 本会の役員に運営資金の管理を行う会計幹事の追加が承認された。
- 2) ウェブプロフェッショナル解散に伴い事務局を会長宅に置くことが承認された。
- 3) 保有資産に鑑み個人会員年会費を¥10,000_から¥5,000_に改定することが承認された。また今後会誌をWEB上に掲載することで会全体の運用コスト削減を図る旨了承された。

5. 第3号議案 会計報告——柴富副会長

- 1) 21年度年収支決算書が承認された。
- 2) 22年度支出予算計画¥649,000_に対し予備費¥100,000_上積みが了承された。

6. 懇親会 総会終了後懇親会が催され、会員相互の近況報告と更なる友好を和やかな雰囲気の中で深めることが出来た。また今回の懇親会は、多くの会員に参加していただくことを意図してMweシニア会が全額負担した。ただし、今後同様に会で全額負担する事については異論もあり検討の余地がある。

6. 配布資料

- 1) 平成22年度年次総会式次第
- 2) Mweシニア会 平成21年度総括——堀会長
- 3) 第2号議案 Mwe (エムウイ) シニア会会則の一部改定の件——柴富副会長
- 4) Mwe (エムウイ) シニア会会則 (平成22年度改定) ——井下幹事長
- 5) 平成21年度Mweシニア会事務報告——井下幹事長
- 6) Mweシニア会平成22年度活動計画——井下幹事長
- 7) Mweシニア会ゴルフ同好会 平成21年度総会議事録——高松委員
- 8) 平成21年度囲碁同好会活動報告——平井幹事
- 9) Mweシニア会名簿 平成22年5月30日現在——井下
- 10) Mweシニア会会員近況 平成22年5月——井下

以上

総会後の懇親会風景



総会後の懇親会風景





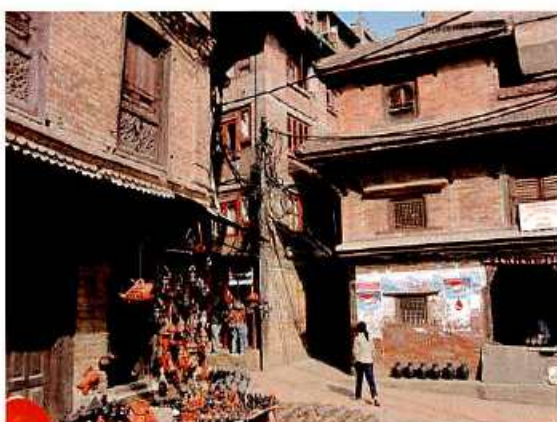
報告

ネパール・ヒマラヤ・ダウラギリゆっくり旅行 (2010/3/14~22)

小林禧夫

1. カトマンズ電力事情

3月14日成田、香港、カトマンズとフライトを乗り継いでホテルサンセットビューへ到着したのは午後11時を回っていた。スーツケースをもって割り当てられた部屋に入ると、突然ホテル内の全電灯が消えた。あ、これが予告されていた停電かと気がついたが、真っ暗闇である。手探りでスーツケースを開け、中をひっかき回してようやく懐中電灯をとりだし、ぱっと明かりがついたときはホッとした。翌日カトマンズ街中に出て、びっくり。電柱の配線がお化けなのであ



る。その電柱写真を見ると電話回線もまじっているようだ。こんな状態なので盗電も多いとのこ

と。この時は乾期で、市内の停電は1日10時間に及び、高級ホテルでは自家発電でカバーするとのこと。また、農村地域や山岳地域では、配電のないところも多いらしい。ネパールは水力発電に依存しているので、旅行シーズンの乾季には停電は慢性的とのことであった。

17日、ポカラからジョムソンまでのフライトは早朝であった、伊藤先生によると、おだやかな追い風の時しか飛ばないので私たちは運がよいとのこと。ひどい時は小石が飛ぶほどの強風が山に向かって吹きあげるので、その風を風力発電に利用できないだろうかと宿題をもらった。

18日、ナウリコット村からダウラギリへのトレッキングの途中、作物の脱穀や製粉に使われている水車小屋があった。この水力で村全体は配電できる小規模水力発電はできないだろうかという話しになって、帰国後、平氏の提案で東京電力の若手と伊藤先生が小規模水力発電所建設の検討を開始したと伺っている。

2. ネパール通信事情

カトマンズなどの都市部では、以前は公衆電話が普及していたが、最近は携帯電話ブームとのこと。日本のODA援助により、いつの頃からNECが主要都市間をマイクロ波回線で結び、その後、日本無線がマリサット衛星を用いた衛星回線を引いたとのこと。しかし、ODAが切れた現在、維持管理はうまくいってないとのこと。これらの日本の通信技術をベースにNepal Telecom社は



パタンで見つけた携帯中継器。



カトマンズ市内の携帯中継器



高度 1000m 付近で見つけた無線中継器



ジョムソン空港を出て、公衆電話を見つける。



ジヨムソン空港付近の銀行屋上のパラボラアンテナと地上に設置されたパラボラアンテナ。



標高 3000m の村で見かけた衛星通信中継所はソーラー発電

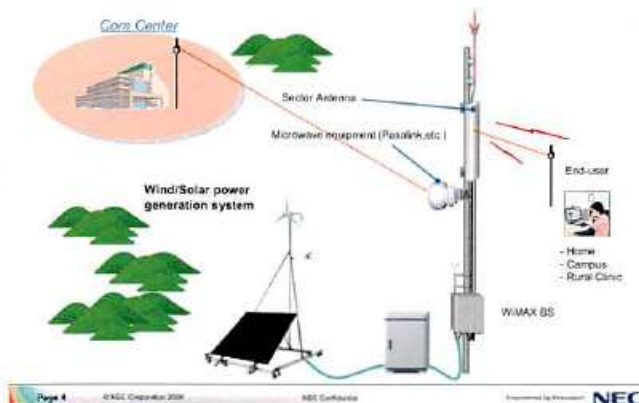


エアポートにあった携帯電話機用充電器

Implementation image



ネパールテレコム社における会談



風力発電やソーラー発電によるパソリンクの発展

設立されたとのこと。NEC、日本無線の担当者からそのあたりの歴史を聞きたいと思った。山の平坦部に開かれ、深い谷間で隔てられたお互いの村同士の会話には携帯電話が重要な役割を果たすことは容易に想像できる。ネパールテレコム社の話では、山岳地帯に点在する村や部落（10～500人程度）間の通信を可能にするために、山の裏側との通信も考える必要がある。山の斜面に建設するマリサット衛星間の衛星中継所の電力は、太陽発電、蓄電器をベースに考えているとのことであった。先ほど述べた風力発電、小規模水力発電の可能性もある。帰国後、NECと日本無線のマイクロ波通信の専門家に個々に相談したところ大層興味をもたれた。特に、NECでは風力発電やソーラー発電によるパソリンク利用の構想があるらしい。

5月21日、NEC三田倶楽部において「ネパール・ワイヤレスネットワーク・プロジェクト」セミナーが開催された。講師として招かれた2007年度マグサイサイ賞受賞者のマハビール・ブン博士は、ヒマラヤ山中においてワイヤレスネットワークを使った貧困対策に取り組んでいる方で、当日の演題は「Wi-Fi, WIMAX 等無線 IP 技術が可能にした辺境地での劇的な生活改善とビジネス展開」であった。残念なことに、私は当日研究発表と重なり出席できなかった。どなたかご出席された方はいらっしゃらないだろうか。お話を伺いたい。

3. 3月20日（土）パルン谷のチツン農場見学

パルン谷はカトマンズから南西60kmにあり、車で2時間。ラブ・グリーン・ネパール代表 アミーラ・ダリさんが経営者で、4家族で運営しているとのこと。朝日新聞(2009/12/19)に日本で学び、母国で社会貢献「自分で切り開かなければ何も変わらない」と紹介されていた。帰路立ち寄った小学校建築現場では、村人達が日干レンガを自作して少しずつ積み上げていくとのこと。



車のスピードが落ちた時がシャッターチャンス。



きれいに整備された棚田



大雨の度に棚田は崩れるので維持管理が大変らしい。



チツン農場内の建物



サンダラスのアミーラ・ダリさんを囲んで。



日本のNPO法人が援助して建築中の小学校

4. 3月16日(火) ヒマラヤ遊覧飛行



早起きしてヒマラヤ・マウンテンフライト



機内の美しいстюワーデスさん



左、雪煙りの立つ最高峰がガエヴェレスト(8,848m)、そのちょっと右がローチェ(8,516m)、さらに右にマカル(8,463m)。

3月17日(水) ムクチナート、マルファ

快晴に恵まれたこと、みな元気なことから、ジョムソン飛行場でジープをレンタルし、チベット仏教とヒンドゥ教の聖地ムクチナートへ向かうことに予定を変更した。途中カリ・ガンダキ川の河原を走るのど、つかまり棒をしっかりとぎって通過。高度を上げるにつれて息があがり、ムクチナートに着くころはふらふらで軽い高山病状態であった。



ジヨムソン飛行場からニルギルノースを望む。



ニルギルノース(7,061m)の頂上



すごいガタガタ道をゆく。途中、カリ・ガンダキ川の河原で小休止。チベットからの巡礼者。



元気を回復して出発。カグベニの村落を遠望する。さらに北へカリ・ガンダキ川を遡れば秘境ムスタンへ。私たちはその支流ジョン・コーラ川に添って右すなわち東方向へ曲がる。



どんどん高度をあげてジャルコット村を通過し、車の終点ラーニバウアに到着。





徒歩 30 分でムクチナート(3,798m)に到着。



ヒンズー教寺院ムクティナラウアン。



巡礼者は 108 の蛇口からほとぼしる「水の壁」をくぐり、2つの聖水池で沐浴して罪業消滅を願う。境内右端にあるチベット仏教寺院ドーレメバル・ゴンパ（石火寺）を参拝。



歩いて橋までもどり、車でホテルへ向かう。元気組 6 名はマルファ村入口で途中下車。白壁と石畳が美しい。日本の NGO が協力してリンゴ果樹園の開拓し、村が豊かになったとのこと。



Safe Drinking Water Station/ピタンバルさん



屋上の木の束は富の象徴とのこと。



19 世紀、河口慧海師が滞在した家。



車は村の門を通れない。夕暮時歩いてホテルへ。

3月18日(木) ナグリコット村タサンビレッジ



ホテルタサンビレッジの屋上からカリ・ガンダキ川を隔てて霊峰ニルギル(6,940m)を望む。



屋上から、その反対側にダウラギリと氷河

ナグリコット村を望遠する。



シャクナゲの群落原までトレッキング。ここで全員写真。間近にダウラギリ(8,172m)と氷河。



ナグリコット小学校を訪問。伊藤先生の訪問記参照。 カリ・ガンダキ河原まできつい散策。

あとがき

ページ制限を受けて、カトマンズ市内の寺院は省略したが、7割は紹介できたと思う。ヒマラヤを越えてきたチベット仏教と南からのヒンズー教が混在する多民族多言語国ネパールの魅力はとて短時間では理解できないことを知った。

埼玉大学図書館に勤めていた伊藤ゆき氏とは埼玉大学定年退職記念パーティで知りあった。ネパール文化人類学の専門家と何って、東京都立大学時代山岳部で活動していた山好きの同級生平強氏を紹介した。2005年頃のことである。Mwe シニア会恒例の MWE2008 前夜祭では、ベンチャーキャピタリストである平氏に「シリコンバレーにおける技術ベンチャーの現状」と伊藤先生に[ネパールへのお誘い]という題目で御講演頂いた(詳細は Mwe シニア会会報 No.21、2009/3)。同朋はともに古希を迎えて、ここで決断しないと時宜を逸すると今回のネパール行きを急遽決断した。伊藤先生は、われわれの好奇心と体力を考慮して、ヒマラヤは遊覧飛行で見るだけ、ダウラギリ山麓トレッキングおよびパルン農場見学のコースを選んで下さった。ついでに私の希望でネパールテレコムの関係者とのネパール携帯電話事情に関する会合を用意して頂いた。最初参加を表明していた柴富氏は3月決算のため、また春日氏はヨーロッパオペラ鑑賞旅行がすでに決まっており、結局 Mwe シニア会からは私1人の参加となった。春日氏には、伊藤先生、風旅行社及び私たち参加者の連絡事務でとてもお世話になり、伊藤先生ご紹介のネパール料理レストランで開催された2回の事前打ち合わせ会にもご参加いただきました。ここに心より感謝申し上げます。ネパール行きを熟望していた春日様のためにも Mwe シニア会で再度ネパール旅行を計画しようではありませんか。



最後に、壺峰ダウラギリを背景に撮った写真から旅行参加者全員を紹介させていただきます。伊藤先生、平さん御夫妻、その友人の蓮御夫妻およびシリコンバレー在住のジャーナリスト滝口さん、蓮さんの友人で主婦の青木さんと山口さん、春日さんの奥様と片山さん御夫妻(奥様同士が御姉妹)、そして私の計12人。黄色いコートは山岳ガイドさん。全行程をガイドして頂いた風旅行社のビタンバルさんにこの写真を撮って頂きました。

報告

ネパールワイヤレスネットワークプロジェクトセミナーに参加して

柴富 昭洋

小林禮夫先生のご紹介をいただき掲記セミナーに参加する機会があった。セミナーは平成22年5月21日、NEC三田倶楽部の3F会議室で開催された。セミナーの主催者はGHA: (社団) グローバル人材支援協会であった。セミナーは主催者の挨拶に続き在日日本ネパール特命全権大使ガネッシュ・ヨンザン・タマン閣下からの来賓ご挨拶があったことからして、当プロジェクトがネパールにおける当該プロジェクトのインパクト大きいことや今後の期待が大きいとの印象を受けた。

セミナーは ①ネパールワイヤレスネットワークプロジェクトの取り組みと今後の課題と ②都市部カトマンズと辺境地ヒマラヤ山脈を結ぶ遠隔医療の取り組みの2テーマがあり、ネパール現地の報告者の発表を受けて、日本の専門家コメンテーターがコメントを行う発表形式で行われた。

①の要旨：発表者はENDR(E-Network Research and Development)プロジェクト代表で「アジアのノーベル賞」と呼ばれているマグサイサイ賞2007年度受賞者であるマハビール・ブン博士である。ネパールはインド北西部と中国(チベット自治区)に挟まれ、国土の殆どをヒマラヤ山脈が占めている。最貧国の一つであり、インフラ関連の整備状況は先進国と比べるまでもなく大変劣っている。更に10年間に及ぶ武力闘争の余波の中、今だ不安定な政治と社会不安がある。現在のネパールの平均寿命は63.3歳、乳児死亡率は1000人中64.4人、15歳以上の識字率は62%である。一方固定電話普及率2.8%、携帯電話普及率23.68%ネパールの主な遠距離通信業者はネパールテレコム社をはじめ4社である。各種インターネットサービスの利用者率は2.80%である。人口は2700万人、人口増加率2.24%、一人当たりの可処分所得約250米ドル、GDP約5.5億米ドル、成長率4.9%/年である。電話及びインターネット関連業の許可数は228件である。ENDRはネパール社会福祉協議会登録の非政府組織であり、何故ネパールワイヤレスネットワークプロジェクトと始めたのか?が今回の発表の主要テーマであった。先ず貧困対策が最優先であるが、中でも最重要な課題は根本的に国民の健康保全の問題解決からである。地理的に多くの人々は辺境地域、遠隔地域に点在している。さらに、医師不足である。ネパール中部の首都カトマンズ近郊の平野部を除いて、西部、東部ともに2000m高度に千人規模の村々が点在する、典型的な農業国である。段々畑、や山羊の放牧とチーズ作り、イラクサ繊維の布生産、プラムジャム作り、紙すき、魚の養殖、保健師訓練、足踏みミシンを利用した裁縫教室、世界の最高峰が林立する壮大な風景が紹介さ

れた。このような山間部の入り組んだ無数の村々をネットワーク化するにはマイクロ波を利用したネットワーク作りしかないとの結論に達した。先ず 2002 年 5 月に初の無線リンクがポカラ市から 34 km はなれた中継器を経て 6km 先のナギ市に開通した。実験段階では木製棒コンピュータも紹介され、測定器や機材はボッカによる人力輸送である。中継アンテナも TV アンテナを改造して、山の頂の立ち木の枝を切り払い設置した。村に設置されたコンピュータラボでは子供達や大人がブラウン管表示の PC の前に群がっていた。その後建設が進み、ミヤディーカスキーパラバト間、マクワンプルーカトマンズードラカ間ネットワークが完成した。コプラ中継局は 3,650m、と殆どの中継局は 3000m 級の高度であるため、まさに人海戦術の設営であった。中継器も掘って小屋の屋根に電源はソーラーパネル 3~4 枚、400W 級の風力発電機 1 台である。バッテリーは大型自動車のバッテリーを 10 個程床に並べていた。またネットは小学校にも接続され、寄付 PC を用いてパソコン教育も始まった。さらに医療施設とも繋がり、保健師の情報交換、超音波診断、心電図等の解析を都市部の医師ともに行う、様々なネットワーク利用状況が報告された。今後は、遠隔保健師訓練、遠隔診察、ワイヤレスネットワーク技術者養成の利用がはじまった。また e コマースの実験も始まった。また Skype による海外との TV 会議も行われた。施設設営、機器は全て国内外の 14 の出資者や支持団体からの寄贈による。このネットワークを維持管理するのに月当たり 1,365 米ドル必要であり、**"One Dollar A Month"**の募金活動も行っている。

当プロジェクトの将来計画はネパール全土に無線ネットワークを張り巡らして、目標である山間貧困地域において技術の恩恵を最大化することである。即ち遠隔教育・訓練、遠隔医療ネットサービス、情報の共有、e ビジネス、ネットバンキング、電子政府等が期待されている。

ブン博士の発表に続いて ENDR 副代表のラジェンドラ・プラサド・ポウデル博士から、ネパールにとって現在どのような ICT インフラが必要であるかの発表があった。インフラ整備にあたっては貧困との戦いなくして解決されない現実問題がある。事実、舗装道路へのアクセスが可能な人口は 8% 未満、質の高い公的医療機関へのアクセスは 5% 未満、識字率 55%、通信施設普及率 2% 未満、森林消失率年 1.3% である。このような現況では先進国のような巨大インフラは“猫に小判”不必要である。先進国では遠距離回線として既に陳腐化したマイクロ波を用いた無線ブロードバンドと関連アプリケーションが今世紀のソリューションであるとの結論であった。例えこのような安価なインフラが整備されても、利用者の金銭的な余裕がないと“室の持ち腐れ”に成りかねない。それ故、インフラの整備と同時に地域住民の収入を増やすことを進めなくてはならない。即ち貧困との戦いでもある。以上のような状況ではるが、様々なビジネスチャ

ンスがあるのではとのご紹介であった。



マハビール・ブン博士 ラジェンドラ・プラサド・ポウデル博士 サロー・ディータル医学博士

② の要旨：サロー・ディータル医学博士よりネパール人民の健康のための ICT の利用：ネパールの夢と現実について発表された。現在のネパールの現状は地面に両足を固定して天まで届け！というようなことです。この「天地程の隔たり」を埋めることは困難なことです。世の中の動きに追いつこうとすると同時に、山と詰まれた未完の課題に取り組まなければなりません。ネパールは未だ根本的な健康保全の問題に直面しています。しかし、先進医療技術を見捨てることはできません。より費用がかからない方へ、より利用され易い方へ、より効率的な方へ向かうべきです。遠隔地は数多くの困難に見舞われており、医療提供者の欠如はその一端に過ぎません。このような環境下では、伝統的な医療施設を建設するための人、資源、エネルギーは途方もないものとなります。それが現実からかけ離れた夢でも、医療仮想教室、リアルタイム遠隔診療、山間部の外科手術のリアルタイム遠隔補助等は現実からかけ離れたものではありません。ネパールの医療人口比は都市部では 9071 人に対して 1 人、山間部では 100,000 人に対して 1 人と 100 倍の開きがあります。問題はどうかやって医師を村に集めるか？です。今回 **ENDR** を使ったネパール初の **ICT** 利用により、遠隔医療の試用を行い、(カトマンズモデルホスピタルと山間部 8 地点のリンク) 遠隔地へのコミュニティーと密接な関係が築けた。啓蒙によるコミュニティー、個人、医療ケア提供者の自由裁量が大幅に増大した。適切な医療技術の利用が可能となったとの多くの成果を得た。ワイヤレスブロードバンドネットワーク技術が、遠隔医療に大進展を与えたことを実証した。しかしながらまだまだ初期段階であり、現実には様々な課題に直面している。即ち、財政的な課題、技術的な課題、さらに思想的な課題がある。これらを一つ一つ克服して行くことにより、山間部の医療と教育における大進展を遂げたいと考え居ている。このことはとりもなおさず、国の経済、政治、文化等の大進展を意味している。

最後のネパールの老婆が微笑む写真と **Thank you!** の文字が印象的でした。

寄稿

オーストリア・ドイツのオペラ旅行

春日 義男（写真も）

2010年2月28日から30日間、ウィーン、ベルリン、ドレスデン、ライプツィヒでオペラとコンサートに明け暮れる日々を過ごした。本会会員に同好の氏がおられるか定かでないが、柴富編集長の要請があったので書いてみます。日本との往復3日を除いた27日間に、オペラを14、コンサートを6回。欧州内での観光も移動もあるから、かなりの強行軍ではあるが、仕事がないので気楽に昼間の観光とマチネ、夕刻から深夜までの音楽を楽しめた。

先ず、この旅行の成り立ちについて。西洋音楽を聴きたいならヨーロッパの主要都市へ行くに限る。夏の音楽祭シーズンを除けば毎晩、時には午前中から何らかの音楽を聴くことができる。私も出張の合間や退職後の旅行中に何回か劇場や教会のオルガン・コンサートへ行っただことがあるけれども、1) 旧東ドイツ圏へ行っただことはなかった、2) ワーグナーのニーベルングの指輪(前夜祭を含めて4演目)を一挙に聴く、3) 円高、4) 現地事情に詳しいドイツ語の先生夫妻が同行した、その他色々。インターネットが発達した今日、是非とも聴きたい演目は売り出しと同時に良い席が無くなるので待ち構えていて席を確保する必要があり、9月中旬から買い始めた。9月末に小林先生から「伊藤先生のネパールゆっくり旅行」が舞い込んだが、諦めざるを得なかった。まあ、ヒマラヤは動かないだろうから、またの機会があると思っている。

ウィーンでは先ずベートーヴェンとシューベルトのお墓に詣でた。その後、市電を乗り継いでベートーヴェンがハイリゲンシュタットの遺書を書いた森へ行き、ベートーヴェン通りとエロイカ小路を散策、ホイリゲで遅い昼食の後ホテルで一休みして、国立歌劇場でシモン・ボッカネグラを聴いた。翌日はスペイン乗馬学校の練習、自然史博物館と美術史美術館（フェルメールの絵画分析の特別展があった）を廻り、晩にはロンドン、ロイヤル・オペラ管弦楽団のウィーン出張公演のワーグナー・コンサートでニナ・シュティメ(ウィーン国立歌劇場のNo.1ワーグナー・ソプラノ)が歌う「イゾルデの愛の死」、「ブリュンヒルデの自己犠牲」他を聴いた。たったの10分でトリスタン全曲4.5時間を聴いた気分になれるという、不思議な感覚を覚えた。

ベルリンへ移って、ブランデンブルク門からウンターデルリンデンを東にマリエン教会からクロイツァー街まで、森鴉外の「舞姫」の道を歩いた。オペラは日程上先ず、ドイツ語の「椿姫」を聞くことになり、イタリア語とドイツ語の違いを思い知らされた。イタリア・オペラの生き生きとしたリズム感がドイツ語になるとまるで伝わってこない。パリ社交界の華やかさと賑わいがベルリンの曇天と同じように暗く重くなる。



ウィーン ベートーヴェン墓



ベルリン マリエン教会

3月6日(土)自然科学博物館、ベルリン市歴史博物館を観、晩はコンツェルト・ハウスでダニエル・バレンボイムが指揮する国立歌劇場管弦楽団によるマーラーの第三交響曲を聴いた。激しく深刻に壮大にオーケストラが響き、合間にナイチンゲールが可愛らしく啼いたり、ちんどん屋風の賑やかな音が混じったり、兎に角美しい音色を積み上げてゆくのに感心し、このオーケストラと張り合うのではベルリン・フィルも大変だろうなどと考えながら聴いていたのだが、第4楽章でワルトラウト・マイヤーが“O Mensch”と歌い始めたらいきなり涙がこみ上げてきたのには我ながら驚いた。

終演後のんびり帰り支度を整えてロビーに出たら W.マイヤーが小さな卓でサインをしていたので、最後尾についた。1968年4月、東京文化会館でのエリザベート・シュワルツコップの最初の来日公演後の長い行列を思い出した。因みにこの日の指揮者は、半年前に購入したときの予告では、メトロポリタン・オペラの指揮者ジェームス・レヴァインだった。

翌7日(日)午後に夜のコンサートの下見の積りでフィルハーモニーを覗いたら、3時からバレンボイムが今年生誕200年を迎えるショパンのリサイタルをやるというので、その場で購入した。前夜マーラーの大曲を2時間弱指揮して翌日マチネをやるエネルギー!! 力強くまるでベートーヴェンのように響くショパンに始めは戸惑った。しかし、繊細で叙情的であるとともに元々芯は強いショパンだから違和感は直ぐに薄れて惹き込まれた。鳴り止まない拍手にアンコールを5曲、最後を「英雄ポロネーズ」で締めくくったのが5時40分。バレンボイムがカラヤン亡き後のベルリンの帝王だという現地の人の話にも納得した。

ポツダム広場でレストランを探して軽い夕食を取り、再びフィルハーモニーに戻って、8時からインゴ・メッツマッヒャー(バレンボイムの後継者との専らの評判)指揮のベルリン・ドイツ交響楽団でカールA.ハルトマンの「ヴァイオリンと管弦楽のための葬送協奏曲」とマーラーの交響曲第7番を聴いた。日本の演奏会ならばマーラー1曲だけで一晩である。独・日演奏者の体力の違いとサービス精神の差か。はたまた、聴衆の来館および帰宅時間の所為か。

ドレスデンは先の大戦で爆撃を受け、ドイツの最も美しい古都が一夜で瓦礫の山に変わったのは広く知られている。東西ドイツが統一されてから20年になるが、未だに随所で工事中である。私の頭にあった瓦礫の山のイメージが完全に覆された。崩れ落ちなかった壁の間に大理石の塊(厚さ1mで縦横数メートル)が積み重なっている廃墟から先ず石の塊を取り除き、使える大理石は元の場所を特定して再建建造物に詰め込んで行くという復興作業がどれほど難渋を極めるか。ドレスデ



最も美しいと評判のコンツェルト・ハウス



ロビーでサインに応じる W.マイヤー



ドレスデン 2005年再建の聖母教会と再建中のユネスコ・プロジェクトの看板

ンが誇るゼンパー・オパーの復興が戦後 40 年の 1985 年、最も古く由緒ある聖母教会の再建は東西統一から 15 年後の 2005 年である。共産主義政権下の経済事情も影響したと思うが、聖母教会の横の広大な敷地ではユネスコ基金による再建事業が始まったばかりである。

日本の各都市は焼夷弾によって焼け野原になったが、戦後 65 年の今日、日本では江戸末期から 80 年近く続いた戦争の記憶は失われつつある。しかし、ベルリンにもドレスデンにもライプツィヒにも、今だに戦争と東西冷戦の傷跡が至る所に残っている。木と紙の文化と石の文化の差を改めて考えた。序ながら毎年ベルリン郊外で夏至頃に催されるヴァルトビューネ音楽祭の会場は、ベルリンの大理石の瓦礫を積み上げて出来た広大な野外音楽堂である。

こんな調子で書き続けると 10 頁でも足りないので、今回の旅行の第一目的だったゼンパー・オパーで聴いたワーグナーの「ニーベルングの指輪」に飛ぶ。3/10w の前夜祭「ラインの黄金」から 3/12f 第 1 夜「ヴァルキューレ」、3/14su 第 2 夜「ジークフリート」を経て、3/17w の第 3 夜「神々の黄昏」まで 8 日間。ブリュンヒルデ役のイヴリン・ハーリツィウスはドレスデン歌劇場の至宝である。ワーグナー・ソプラノにしては小柄で、可愛らしいとさえ云えるのだが、初登場のヴァルキューレ第二幕の第一声には飛び上がらばかりに驚いた。ヒルトン・ホテルのショウ・ウィンドウにあったオペラグラスで覗いていたのだが、口が一瞬 0 の字に大きく開いて閉じたのに声が聞えない。変・と思った一瞬「ホヨトーホ」の叫び声が劇場が割れんばかりに響き渡った。私が始めて声楽を聞いたのは高校一年の「中沢桂ソプラノ・リサイタル」で、それ以来 45 年以上随分沢山の歌声を聴いて来たが、今回ばかりは心底驚嘆した。今、この文を書いてもあの時の情景が目に浮び、耳に響く。そしてまた、こういう超一流が舞台上でさえ発声前の準備運動をしていることに改めて感銘した。超一流たる所以か。

最初の一声に近い歌に驚いた記憶を辿ると、NHK ホールの落成記念のイタリア・オペラ公演「アイダ」でエジプトの王女アムネリス役を演じたフィオレンツァ・コッソットである。もう 30 年近く昔だがエチオピア征伐に向かう將軍ラダメスに軍旗を授ける場面で”di mia man riceve, o duce, il vessillo glorioso; ti sia guida, ti sia luce della Gloria sul sentier”「おお指揮官よ、私の手から名誉の軍旗をお受けなさい……」と 20 秒弱を歌った。この時点でこの日の演目はオペラ「アムネリス」になった。オペラ「アイダ」の面白さのひとつは、エチオピアの王女アイダ（ソプラノ）とエジプトの王女アムネリス（メゾ・ソプラノ）および將軍ラダメス（テナー）の三人の声の饗宴にあり、トーマス・マンは長編「魔の山」に「蓄音機から流れてくる声を聞くとアムネリスもアイダに負けず劣らず魅力的だ」と書いた。この二人が拮抗すれば素晴らしい公演になる。そこそこのアイダならオペラ「アイダ」のままだが、アムネリスがアイダを圧倒してしまうとオペラ「アムネリス」になってしまうという訳である。この日以来、私の音楽仲間では、「ドン・ジョヴァンニ」が「ドンナ・アンナ」になったり、「トゥーランドット」が「リュウ」になったりする。



ドレスデン王宮、彼方にゼンパー・オパー



E・ハーリツィウスとA・エーベルツ

閑話休題。ドレスデンのゼンパー・オパーでの「指輪」は2003年の新演出で一舞台が美しく面白く、物語を追う助けになり、音楽の邪魔にならずで実に良かった。毎年好評を得てきたらしく、2009-2010シーズンには3回の公演が行われた。その最後の公演を聞いたわけであるから、劇場側に見れば得意中の得意、主要な歌手がきちんと歌えば成功間違いなしだろう。実際、その通りだったが、どういう訳か、指揮者が毎回変わった。インターネットで購入したときの指揮者はこの劇場の音楽監督ファビオ・ルイージで、彼が指揮するときだけはオーケストラが凄いという前評判を聞いていたから、ルイージの指揮も楽しみの一つだった。ところが当日の劇場のポスターには指揮者の場所に聞き覚えのない名札が張ってあった。ルイージは今回ウィーンで「シモン・ボッカネグラ」を元気に指揮していたから病気のはずはないが、どうやら最終公演4演目を若手の期待の星3名に任せたいらしい。こうして若手が経験を積んで育てゆくのだろう。分厚いスコアを捲るのに忙しいような指揮者もいたが、馴れた演目で歌手とオーケストラが勤めを果たせば立派な公演になるのも分かった。

一幕70分から2時間の長さなので、休憩時間も長い。「ジークフリート」の幕間では夜会服の日本人女性が「この公演を聴くためにケルンから来た」という。指輪4公演では最も地味な作品だから、「何故、ジークフリートなのですか」と尋ねたら「友人のご主人が主役（ジークフリート役のアルフオンズ・エーベルツ）で出るのでは」と。

隣席に同じ人が来れば、「又会いましたね」くらいの挨拶はする。隣には私と同年輩の夫婦とその子供夫婦らしい計6人が最前列と2列目の3席ずつに、幕が変わる度に前後で入れ替わっていた。彼は「スウェーデンから来た。家族皆がワーグナー好きで、妻は『指輪』4作を通して聞くのが3回目で、子供たちは2回目だが、私と最近家族の一員になったあの娘は今回が始めてだ」と。「私も初めて通して聴くために日本から来た」「何時決めた?」「半年前」「私たちも」などと笑い合い、終演後には「それでは、明後日の『ジークフリート』で」という具合。

8日間-4公演の間に「魔笛」、「トスカ」とバレエ「眠りの森の美女」があった。「魔笛」はどういう訳かネットで券が買えなかった。「トスカ」の晩には劇場前の広場に大型観光バスが20数台ずらっと並んだ。ワーグナーだと精々6-7台なのに。「魔笛」は海外の旅行業者が買い上げてしまったのだろう。モーツァルト、プッチーニとワーグナーのポピュラリティの差か。

3月14日(日)には、聖母教会のマチネで、ロッシーニの小荘厳ミサ曲があった。ロッシーニの宗教音楽は聴いたことがなかったし、「小」だから1時間くらいだろうと想像して券を購入したのだが、これが大間違い。何と90分の大曲である。小さいのは演奏家の編成で、4人の独唱者に合唱、ピアノとハルモニウム、そして語り手と指揮者である。帰国して音楽辞典を調べたら1863年、ロッシーニ71歳の作品である。美しいメロディがちりばめられていて楽しく聴いていたのだが、4時20分を過ぎても終わる気配がないのでいささか焦った。5時からゼンパー・オパーで「ジークフリート」が始まるのである。幸い、4時40分に終演し、その10分後にはオパーの指定席に付くことが出来た。こんな芸当が出来るともヨーロッパの小都市ならではか。また、何時の日か、ロッシーニの「小荘厳ミサ曲」を日本で聴く機会があるのだろうか。



ドレスデン 聖母教会の小ミサ曲

ドレスデンには9泊して、毎日マイセン陶器製「王者の行進」の壁の前を通り、聖母教会の美しい晩鐘を聴き、鷗外の「うたかたの記」にも出てくるラファエロの絵で有名な美術館を見たりしていたが、オペラのない一日、プラハへ出掛けた。ご存知の方が多いだろうから観光は端折って、忘れられない体験を書く。帰りの終電は18:31発なので、発車2分前に真っ暗なホームへ上がり最後尾車両のドアノブを回したが、開かない。押しボタンを探しても見当たらない。ドアの不調だと思い、次の車両で同じことを繰り返したが、開かない。三つ目の扉で苦闘しているうちに列車が動き出した。次の停車駅プラハ北駅までは10分かからないので、ドアの取っ手に掴まっていれば大丈夫かと思いつつも、「日本人観光客・・・」と騒がれるのは御免なので諦めた。暫しベンチに座って『大体ブルノを午後3時に出発した列車がプラハを定刻通りに入るのも信じ難いが、発車の2分前にドアを閉じてしまうとは以ての外。こんなことになるならプラハ歌劇場の「蝶々夫人」を買って置けば良かった』などと考えたが、後の祭りである。どうせ一泊するなら中心街が良いが、戻るのも面倒なので駅前のホテル「シヨパン」に飛び込んで一晩の宿を請うた。

知的な雰囲気を受付嬢に、「気に障ったら申し訳ないが」と前置きしてこんな話をした。「道を尋ねてもお店で買い物の助言を求めても英語で不自由しない。Thank you.と云えば気持ちのいい笑顔とYou're welcome.が戻ってくるのに、(ここはドイツ語圏だったと思い出して)Danke schoen というと何となく気難しい雰囲気になるね」と云うと、ちょっと小首をかしげていたが、こんな返事が返ってきた。「チェコが外貨を得る道は観光しかない。英語は不可欠で、次はフランス語とスペイン語。この三ヶ国語を学ぶ人は多いです、米英仏西からのお客さんはほぼ不自由なくプラハを楽しんでいただけます。ロシア語とドイツ語を勉強する人はあまりいませんね。」ロシア語という言葉が出てきたのは予想外で驚いたが、これで判った気がした。

この言葉を聞くまで、私にとってプラハは神聖ローマ帝国第二の都で、モーツァルトが「ドン・ジョヴァンニ」を初演し、ドイツの作家フランツ・カフカ(生家は観光名所になっている)が生まれ育った土地であり、長い栄光の歴史をもつ中欧有数の都市であった。しかし、モーツァルトはザルツブルグ生まれのオーストリア人、カフカはドイツ語で創作したユダヤ人である。ボヘミヤの人たちにとってドイツ語は外国語だった。勿論ロシア語も。

1968年の「プラハの春」は受付嬢の生まれる前の事件だが、17年前のチェコ共和国の独立は鮮明に覚えているだろう。彼女の両親は私とほぼ同世代に違いないから、先の欧州大戦の終結からプラハの春までの23年、その挫折から1989年のベルリンの壁崩壊までの21年、更にその20年後の今日までの60年前後を生きてきた筈である。

どのような人生だったか。更に遡ってみる。旧市庁舎前広場には宗教改革者ヤン・フスの堂々とした銅像が建っていて、説明プレートには「ラテン語聖書をチェコ語に翻訳して説教し、異端とされ1415年に焚刑」とあった。観光書には「ボヘミヤは14世紀に繁栄して、神聖ローマ帝国を構成する7君主連合の筆頭になった。が、15世紀にはハプスブルグ家の支配下に、第一次世界大戦後はドイツ第三帝国に、第二次大戦後はソ連に



プラハ 仕掛け時計前の新婚さん_右奥は旧市庁舎。花嫁さんだけは半袖で寒そう



プラハ 旧市庁舎前広場のヤン・フス像

支配された。プラハの春を経てベルリンの壁が破壊されてから自由化が始まり、チェコ共和国として真の独立を得たのは、1993年1月」とある。ボヘミアにとって長い長い歴史である。旅行先で列車・バスに乗り遅れるのは学生時代からの得意技だが、今回は随分良い勉強をした。

ライプツィヒも音楽と縁が深い。バッハが活躍したトーマス教会(戦後にヨハネ教会から移されたバッハの墓もある)、ライプツィヒ大学付属のグラスシ楽器博物館(イタリアの楽器製作者クリストフォリの1726年製ピアノが展示されている)、1743年創設の世界最古の歴史を誇るゲヴァントハウス管弦楽団、1989年のベルリンの壁撤去の発端となった「平和のデモ行進」出発点のニコライ教会など。民主化を求める市民デモに対峙する警察・軍部に対して、武力行使を避け平和的解決を呼び掛けたのは、当時のゲヴァントハウスの指揮者クルト・マズアであった。

ライプツィヒには2泊して、オペラ劇場でプロコフィエフの「三つのオレンジへの恋」、ゲヴァントハウスでJ.S.バッハの生誕325年記念音楽会を聴いた。バッハ記念音楽会では庄司紗矢香がヴァイオリン協奏曲第1番を弾いた。彼女を前に聴いたのは1999年7月オーチャード・ホール「NEC 若い芽のコンサート」で、その4ヵ月後に「パガニーニ国際ヴァイオリン・コンクールで日本人初の優勝、史上最年少(16歳)」との新聞見出しが躍った。あの時の少女がバッハ所縁の地で歓迎され盛大な拍手を受けているのを見るのは、感無量であった。

ライプツィヒでもう一つ。昼食にアウアバッハスケラーに出掛けて、正面一番奥のテーブルに座った。メニューを見ながらウェイターにあれこれ尋ねてやっと注文が終わり、落ち着いて周りを見渡して驚いた。斜め後上方に森鷗外が座っていたのである。プレートには2009年作とある。何という奇遇などと語りながら食事していると、日本やドイツの団体客が来て私たちの目の前に並ぶ。ガイドが「留学中の23歳の森鷗外が125年前にこの店で、友人井上哲次郎(後に東京帝大初代哲学科教授)とファウストの翻訳について語り合い、その27年後に最初の日本語訳ファウストを刊行した。近代日本を代表する文豪で陸軍軍医総監になった…」と説明して、奥へ入ってゆく。因みにこの絵は左に軍服姿の鷗外(明治18年・1885・ドレスデンでの写真に基づく)、右に同じ頃の井上哲次郎、左後にメフィストフェレスとファウストを配し、それを右端の鷗外(明治45年・1912・ファウスト翻訳当時の写真に基づく)が回想している(?)という、なかなか凝った構図である。



規定の頁になった。雪解けの朝に咲いていたスノー・ドロップス、ルターが95箇条の論題を貼り出したヴィッテンベルクの城教会、ベルリンの「トリスタンとイゾルデ」、三大テナーで有名なプラシド・ドミンゴのバリトン転向後の「シモン・ボッカネグラ」、ポツダム広場に隣接する一等地に建設された「虐殺されたヨーロッパのユダヤ人を記録する記念館」、急に春めいてきた3月下旬の暖かいそよ風—といっても気温は8℃くらい—、ポツダム宮殿裏のフルーティストと共演した「荒城の月」など、思い出は尽きない。今回の旅行は準備段階から帰国後まで、本当に多くの方々のお世話になりました。心から感謝申し上げます。

趣味悠々

焼き物作り（陶芸）に目覚めて

2010年8月20日

渡邊 邦夫

定年退職、これからの人生

それは2007年12月末の寒い日からでした。それまでの電電公社、NTTに24年間、富士通に16年間務めたサラリーマン生活を終え、それから先に義務として勤務しなければならない契約が全く存在しない悠々自適の生活が無意識のうちに始まりました。

年が明けて、それまでは趣味と思っていたゴルフや読書、音楽鑑賞、旅行など、誰にも干渉されない全く自由な時間を毎日過ごすうちに、これは私だけの感覚かも知れませんが、悠々自適も度が過ぎると何とも身の置き所が無い不安定な気持ちになっていることに気付いたのです。不安定な気持ちの中身は今でも判然としませんが、強いて考えれば、単に悠々自適では自分自身が生きることの実感を持つことができない、のんびり過ごすだけの時間に人生の安定は無い、そんな気持ちのように思います。達成感が無いのです。そして、どのようにすれば達成感を持てるのか、生きがいを持ってこれからの人生を送れるのか考えました。多分、それまでのサラリーマン生活での多忙な業務とは異なった意味で、人のために何らかの形で役に立てること、人のために何かを残す活動をする、子供や孫たち、友人、さらには歴史の中に自分が生きてきたことの足跡を残す生き方ができれば、不安定な気持ちを少しは拭い去ることができるように思われました。

そして、当時は健在であった妻と、これからの自由な時間の過ごし方を相談し、ゴルフ、テニス、旅行、園芸、音楽鑑賞、料理、絵画など、次々浮かぶ時間つぶしの活動を実行しながら考える中で、“ふとしたきっかけ”から陶芸を思い立ったのです。

“ふとしたきっかけ”は、陶芸を趣味としていた友人が我が家へ作品を手土産に持ってこられ、その作品を受け取ったその瞬間、自分自身の子供のころの思い出が走馬灯のように脳裏を駆け巡ったことでした。

子供のころは、東京世田谷で開業医であった父、昔は看護婦であった母、3人の弟妹と、将来は父の後を継いで当然医者になるべく、学業に明け暮れる毎日を過ごしていました。そのような毎日の生活の中で、自分で小さなガス窯を用意して時折、作陶をする父の後ろ姿を何となく見ており、時には自分でも粘土をこね、轆轤を回して遊んでいたことを、友人のお土産の陶器を手にしてふと思い出したのでした。毎日使っている食器や売り物の陶器からはそのような

思いは全く起こらなかったのに、その土産を見て“人の手で作る”というプロセスを思い起こさせてくれたのではないかと感じています。

そのことがあってからは“陶芸”の二文字が頭から離れない毎日になりました。陶芸は、自分で作ったものが自分自身の表現として世界に一つしかない、場合によっては人の役に立つ、後に何百年、何千年も残る、陶芸は単に土こねの技術だけでなく、絵画、書、歴史、地理、化学、そして幅広い文化的知識を必要とするなど、これで終わりということがない、完成することの無い奥深さが、これからの人生を生きていくときの頼りがいのある柱のような気がしたのです。

陶芸教室

その時にそれほど固い決断をした訳ではありませんが、陶芸を“本格的に”始めてみようと思い立ち、早速、友人の紹介でその友人の通う陶芸教室へ入会しました。陶芸教室なるものはインターネットで調べてみると、神奈川県だけでも数十件も見つかります。その中で、その教室へ通うことになったのは、今思えば大変に幸運なことでした。また、陶芸を始めてみようと思った時から陶芸に関する美術展、美術館などに頻繁に通うようになり、さらには有名な窯を訪問するようになって、見る目も肥えてきたように思います。未熟な私に、数ある教室を評価する能力があるとは思っていませんが、それでも陶芸教室はピンからキリまでと言っておいた方が良いでしょうと思います。

陶芸は“一に焼き、二に土（釉薬を含む）、三に作り”と言われ、一般に陶芸を趣味とする人たちの行なっていることは、私も含めて“三の作り”の世界にやっと足を踏み入れただけのこと、テレビの趣味の教室などで紹介される陶芸もほとんどは“作り”の世界を垣間見るだけであり、その世界だけでも何年もの収斂と勉強が必要なのです。ですから、土のこと、釉薬のこと、焼きのことまで含めて、総合的な力、能力があって初めて一つの完成した作品になるため、趣味で陶芸を始めるには教室を選択、良い師匠に師事することが、いかにして良い作品を手に入れられるかを支配することになるのです。

一瓶窯と北大路魯山人

私の加入した陶芸教室は“一瓶窯”と名付けられています。

一瓶窯は、陶芸教室の形態としては日本最古と推定される創業50年の歴史を持ち、平凡社の創設者、下中彌三郎翁が興した窯である“彌三郎窯”を引き継ぐ陶芸教室です。当初、かの有名な北大路魯山人が主宰する星岡窯の工場長を30余年間勤めた松島宏明（文智）さんがすべてを任されていたが、の

ち、その四男、松島芳さんが引き継いで“一瓶窯”と改称し、松島芳さんが亡くなった現在は、その一番弟子の斉藤政信さんが指導者として活動をしており、かたち作りや織部の釉薬など魯山人技術を継承する唯一の窯（教室）として、盛況をきわめています。本誌の主旨と外れますので詳細は触れませんが、そこに通う会員（今では友人）との付き合いもまた、今までの仕事での人間関係とは全く異なる新鮮な感覚を覚え、陶芸を始めて良かったと思うことの一つの理由になっています。

北大路魯山人は、歴史に大きな足跡を残した文化人であり、残されたその作品が目の飛び出るほどの高価で取引される今日の日本文化のあり方など、勉強すればするほど興味の尽きない存在であることを知り、それだけでもまた陶芸を始めて良かったと思う存在です。

先ほど、陶芸は“一に焼き、二に土（釉薬を含む）、三に作り”と言いましたが、伝統ある“一瓶窯”に参加するということは、自分自身でできる“作り”の部分がそれほどのレベルでなくても“一の焼き”、“二の土”が50年の伝統に裏打ちされたものであれば、出来上がる作品にそれなりの趣が表現されることを理解していただけるのではないかと思います。

そうです、陶芸を趣味とするとと言っても、始めてからやっと3年、趣味で教室に通ううちはその程度の世界であることをやっと身にしみて理解できるようになったところです。

作品とこれからの取り組み

写真は最近の私の作品の一部です。始めてわずか3年ですが、最初の年には週に4、5日は陶芸教室に入り浸り、一年目の入門過程を終了するとすぐに轆轤を挽き始め、真冬の寒い時にも手を真っ赤にしながらも自ら作品を作り出せる喜びで充実した毎日でした。生来の手先の器用さもあって、轆轤を回す技術では教室の指導者からも「以前に他で作陶した経験があるのではないか」と言われるほどに早い上達であったように思います。できた作品を差し上げた友人、親戚の人たちにも、多少の驚きと喜びの中で使ってもらっているように感じています。

しかし、形をそこそこ作れるだけで良い作品になるはずもなく、たとえば茶道で用いる茶碗には秀吉の時代に見出された素晴らしいといわれる作品にあるような一定の形式表現が実現できなければ、いかにも素人作品になってしまいます。また、高さ30cmを超える花瓶や直径40cmを超える大皿などの轆轤引きは、完成するかどうかはまだ偶然の中にあります。さらには、使用する土と釉薬の関係、焼きあげるときの窯の状態、置き場所、一昼夜を超える火加減の調整など、教室の指導者にほとんどをゆだねる部分の体現など、本当の意味

で陶芸を自分で実現することはこれからの人生のすべてをかけても見届けることは困難のように思われます。趣味として続けることの限界を感じ始めたこの頃ではありますが、それでも、とりあえずこれからを生きる柱の一つとして陶芸に取り組んでいこうと思っています。

これからの人生

今年6月のMWeシニア会の懇親会で、会誌編集幹事の柴富様との“ふとした”会話からこの投稿を依頼され、稚拙な文章を公表することを恥じて固辞したものの、自身の不用意な発言の責任をとって恥を忍んで筆をとりました。

“定年退職後の生き方”と書きながら現在はウェイブ・エレクトロニクス・ジャパン（株）の非常勤顧問の職にあること、“当時は健在であった妻”のその後に触れなかったこと、“父の後を継いで医師になるべく勉強”していながらその後の人生はIT産業界に身を置いたことなど、私の人生にとっては陶芸とは別の意味でこれからの人生を支配する大きな出来事ばかりです。陶芸について書くことをお約束した今回の主題から外れますのでこれ以上は触れませんが、いつかお話しする機会があったらご説明申しあげることをお約束して、筆を置くことにします。

渡邊 邦夫





会社紹介

株式会社 エクサテクノロジー

代表取締役
鳥塚 英樹

弊社はマイクロ波、ミリ波回路機器の受託開発設計から製造、販売まで一貫して行うメーカーです。従業員は9名、内6名が技術者です。技術者の殆どは東芝にてマイクロ波、ミリ波回路機器の設計、開発、製造にかかわった高度な技術を持つ技術者集団です。

弊社の会社概要と開発技術内容、及び製品内容を下記スライドにてご紹介致します。



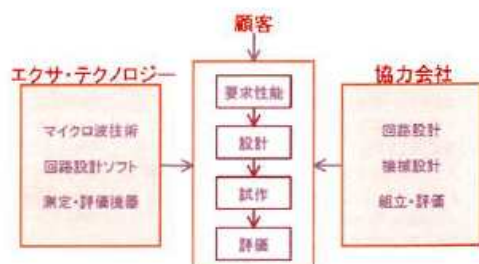
(株)エクサ・テクノロジー概要

- 所在地: 川崎市宮前区宮前平1-7-5
プラムフィールド 4F
- 設立: 1997年10月1日
- 資本金: 1000万円
- 従業員数: 9名(2010年7月現在)
内技術者6名
- 会社URL: <http://www.exo-tech.co.jp/>

(株)エクサ・テクノロジーは

- マイクロ波・ミリ波回路機器の開発・設計から製造・販売まで一貫して行うメーカーです。
 - 多品種少量品の開発・生産が得意です。
 - 製品化実績が豊富です。
 - 1台から外国産の保守品を国産化いたします。
外国の保守品を探すより、国産化が有利です。
 - お客様のご要求に合致した製品を設計致します。
先ずはご相談ください。

開発・設計の流れ



- 顧客、協力会社とのチームワークを大切にします。

開発・設計事例

No.	製品	特徴
1	レーダー用RF増幅器(9GHz帯)	マグネトロン半導体
2	レーダーフロントエンドモジュール	高性能、低価格
3	救命用レーダートランスポンダ	レーダー応用
4	木材含水率計センサー	センサー応用
5	官公庁向け各種コンポーネント	高信頼性
6	官公庁向け各種コンポーネント	製造中止品の再設計
7	官公庁向け各種コンポーネント	広帯域増幅、増幅
8	官公庁向け各種コンポーネント	広帯域ミリ波増幅、周波数変換

事例1. レーダー用RF増幅器



- マグネトロン → 半導体発振器+RF増幅器 の置き換えを目指し、開発が進められています。
- 当社では、これに対応するため、RF増幅器を先行開発しました。



事例2. レーダーフロントエンドモジュール



- 低価格のレーダーF/Eモジュールを実現しました。



事例3. レーダーパフォーマンスモニター



- レーダーパフォーマンスモニターの機能
 - レーダーアンテナから放射されるRF電力を測定
 - 微弱電波を発射し、レーダーの受信感度をチェック



事例4. 救命用レーダートランスポンダ



- 救命胴衣1つに対して1つの救命装置を付け、捜索側からのレーダー波に应答して遭難者の位置を知らせます。



事例5. 電子スピン用VCO



- 発振周波数: 9GHz帯
周波数安定性に優れた発振が得られます。



事例7. 木材含水率計センサー



- センサー応用
 - 「マイクロ波式」は、木材の芯まで100%計測できます。「電気抵抗式」は表面のみ、「高周波(静電容量)式」は表面より20mmぐらいの部分しか測定できません。

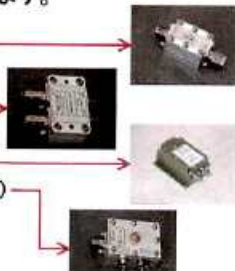


事例8. 官公庁向け各種コンポーネント



- 各種の製品を納入しています。

- RF-AMP
- 検波器
- ダブルバランスミキサー
- シングルバランスミキサー
- 広帯域VCO
- 誘電体共振発振器(DRO)
- マイクロ波PINスイッチ
- レーダ評価装置



測定・評価機器



名称	型番(メーカー)	性能	台数
ベクトルネットワークアナライザ	B510C(HP)	45MHz~50GHz	1
ベクトルネットワークアナライザ	B703A(HP)	130MHz~20GHz	1
スカラーネットワークアナライザ	B757D(HP)	~20GHz	4
ゲインフェーズアナライザ	B7510A(HP)	100kHz~300MHz	1
周波数カウンタ	#5373P(Advantest)	500MHz~27GHz	1
スペクトラムアナライザ	#3273(Advantest)他	100Hz~26.5GHz	3
スイーパ	B350B(HP)	2GHz~20GHz	3
シンセサイズドスイーパ	B3752A(HP)	10MHz~20GHz	3
ファンクションジェネレータ	3312A(HP)		1
オシロスコープ	DL1520(横河)他	150MHz	3
NFメータ	B970B(HP)	10MHz~2GHz	4
環境試験器	SU-261(エスベック)	-60~+150℃	1

主な取引先

- 株式会社 東芝
- 株式会社 東芝電波プロダクツ
- 株式会社 古野電気工業
- 株式会社 日本電子
- 株式会社 長野日本無線
- 株式会社 三菱重工
- 株式会社 富士通
- 株式会社 ソニー
- 株式会社 オプティクス
- 株式会社 多摩川電子
- 株式会社 アポロ技研
- 株式会社 オリентマイクロウェーブ
- 株式会社 オムロン
- 株式会社 機光電製作所
- 株式会社 ローレルバンクマシン
- 株式会社 イナートロン
- 東京海洋大学



協力会社



- 理研電具製造株式会社
製品組立、評価
- (有)プロシード・テクノロジー
回路設計、技術コンサルティング
- (有)マッキーエンジニアリング
機械設計、製造
- アイ電子株式会社
製品設計、製造



特性試験室での鳥塚秀樹代表取締役

自己紹介

高橋 弘

私高橋弘は現在マイクロ波用の電子部品の開発会社(株)サンケンに勤務しております。Mweシニア会編集長の命により自己紹介するようにとのことで紙面を借りて恥ずかしながら書いて見ます。

昭和10年神戸生まれです。集団疎開を経て26年東京に出てきました。昼間は福音電機(現パイオニア)に勤めながら夜工業高校に通ってました。そんな或る日早稲田大学電気通信学科の岩片秀男教授が実験を手伝う助手を探して居られることを知りました。岩片教授は「電磁界



と空中線」の著者で知られる高名なアンテナの専門家で戦時中は海軍の研究所で将校待遇でレーダーの研究をされていたと伺っています。戦後教授の元に海外から船便で沢山の文献が届けられるようになりました。そんな中にベル研から出版されている **BSTJ.1952,Jan.** の **C.L.Hogan** の論文、「**The Microwave Gyrator**」に注目されました。何とかして国内初の研究に着手したいと考えておられました。当時、岩片研究室には若手の優秀な人材が集まっていた。助手の清水司先生(工博、後に第十一代早稲田大学総長)大学院生小原啓義氏(工博、早稲田大学名誉教授)同、岡田文明氏(工博、防衛大学名誉教授)同、堀俊雄氏(アンリツ)、田所康氏(NHK)など。議論して検討の結果 **Gyrator** が面白いテーマであることが分かり日本で初めてマイクロウェーブ用のフェライトを開発することになりました。ここに高橋弘が参加することとなりました。

当初フェライトとは何ぞやということになり高周波トランスのダストコアを手に入れ粉にして見ましたが旨く行きません。先ず手始めはファラデー旋波子用丸棒フェライトの製作が課題となりました。研究室は電気通信学科の卒業生で粉末冶金分野の知識が何処にあったのかと思えるほど猛勉強で挑戦しました。秋葉原で粉末成型用のポンスを買い求めにでかけました。それからシリコン系の電気炉を購入致しました。粉末の攪拌は当初乳鉢で行いましたが中々均質に混ざらないので途中からセラミック系のボールミルにしました。最初の難題は材料の選定でした。フェライトは3価の Fe_2O_3 と2価の **XO** との1:1の固溶体でXには **Zn,Mn,Cu,Ni,Fe,Mg**, 等が用いられます。原材料の酸化鉄他は日本橋の薬品会社より買求めました。製法は湿式と乾式があり両方検討しましたが乾式で実験を進めました。これらの装置や原材料を並べると電気通信学

科の研究室がまるで化学実験室の様でした。幾例かの原材料の配合比を決めて実験にかかりました。モル比から重量の計算は算盤がお得意な清水先生が受け持たれました。測定系は当時予算が無く銅の丸管を購入してスロットラインは変換器など手作りしました。発信器は秋葉原のジャンク屋で見つけてきたクライストロン(Xバンド)でした。フェライトについては当時情報が少なく手探りの状態でした。**Ni-Zn**系、**Mn-Mg**系、など組成の選び方や焼成温度、持続時間、雰囲気(酸素、窒素)形状(丸棒、板上など)寸法など膨大なパラメーターとなりました。それらとフェライトの質、印加磁界とファラデー回転角度、挿入損失などで評価致しました。

確かなことは憶えておりませんがフェライトの組成は我々の実験結果ではNiフェライトが大当たりで、焼成温度**1250**度キープ**3~4**時間が最適と言うこととなりましたが、温度設定、最高温度など条件ば微妙でした。実験では**NaCl**の誘電率が**5**で損失が**0.001**であることを知りフェライトの周囲を包んだところマイクロ波帯で高性能な単行管が出来ることがわかりました。研究室では基礎的なテンソル透磁率の測定を岩片—清水—岡田ラインで、また回転角、損失の評価は岩片—清水—小原、山口ラインで追跡しました。軽量、混合、焼成は高橋の受け持ちでした。そしてそれぞれの研究成果は通信学会の全国大会や連合大会への論文として発表されています。また数件は特許、実用新案として取得しています。この時期岩片教授のご尽力で電電公社通信研究所河津祐元氏松丸勝氏から委託研究のテーマを頂、**4GHz,7GHz**帯で実用回線に単行管(**Uni-Guide**)の呼び名で採用されたようです。設備の貸与を頂き測定定数や精度は格段に上がりました。一部は箱根愛宕山、麻布端局等に名残があると聞いています。

昭和**29**年当時の大学受験誌「蛍雪時代**7**月号」に早稲田大学電気通信学科の研究室が紹介されています。

高橋は早稲田大学の研究室に居ながら学部の学生の卒業生の卒論の面倒を見ながら約**15**年を過ごし昭和**37**年大学院修士課程を修了致しました。昭和**37**年日本フェライトに就職しました。厚木研究所で高周波用の開発と**TV**アンテナ短縮の研究をしました。その後マイクロ波フェライトの実用化とその応用に転じました。昭和**47**年**3**月にフェライトのマイクロ波応用の専門会社日本マイクロウエーブ(株)立ち上げました。当時小西式の集中定数理論方式の時代でした。**TVRO**の時代に入り**4GHz**サーキュレーターは分布定数方式で月産数万個も生産する時代になりました。またこの時期防衛大学岡田文明教授への特殊フェライトの開発で協力し、世界最高性能**CM500KW**の多層大電力サーキュレーターの開発にお手伝いすることが出来たことも嬉しい思い出です。後に世界に認められる**OKADA RESONATOR**です。

集まりつどいて

螢雪時代

七月号



昭和 29 年



螢雪時代に掲載された研究室

余談： 平成 21 年 2 月沖縄亜熱帯計測技術センター見学会の折、ご参加の高橋弘様が集団疎開で岡山の小学校に疎開。当時の小学校の恩師(女性)が沖縄でご健在とのことで 60 数年ぶりに再会。また平成 21 年 11 月京大 MU レーダーの見学会と紅葉の信楽の旅では、信楽のご近所に住まわれていた小学校時代の同級生(女性)と 60 数年振りに再会されました。ご再会前日の懇親会では満面に笑みを浮かべ、青春時代にもどられたご様子でした。
(柴富談)

Mwe シニア会ゴルフ同好会便り

第35回 Mwe シニア会ゴルフ大会は、川崎国際生田緑地ゴルフ場で開催されました。今回は、距離は余りありませんが、砲台グリーンで技術を要求される難コースへの挑戦です。

さて結果は井下選手と酒井選手が、同ネットで並びましたが、大会ルールによりラスト9ホールで上回った井下選手が優勝されました。

残念ながら酒井選手は1打及ばず、準優勝に退きました。また、北爪愛子様ゲスト優勝に輝きました。

第35回 Mwe シニア会ゴルフ大会

優勝	井下 佳弘	Net 74 (Gross 94)
準優勝	酒井 正人	Net 74 (Gross 107)
第3位	奥野 清則	Net 78 (Gross 86)
LD賞	高松 秀男	245Y (No. 4)
	田中 淳	230Y (No. 17)
NP賞	高松 秀男	14.0m (No. 9 160Y)



優勝の井下選手（右側）

☆☆ 優勝おめでとうございます ☆☆



前回優勝の菅田選手（左側）へ優勝レプリカの贈呈

		OUT	IN	Gross	HDCP	NET	順位	次回 HC
第1組	井下 佳弘	45	49	94	20	74	優勝	15
	北爪 進	51	51	102	10	92		
	小山 悦雄	44	46	90	3	87		
	菅田 孝之	51	49	100	17	83		
第2組	奥野 清則	43	43	86	8	78	第3位	7
	酒井 正人	58	49	107	33	74	準優勝	28
	田中 淳	51	47	98	16	82		
第3組	柴富 昭洋	47	45	92	9	83		
	高松 秀男	44	46	90	10	80		
	北爪 愛子*	51	51	102	33	69	ゲスト優勝	



第36回Mweシニア会ゴルフ大会は、立川国際カントリー倶楽部で開催されました。小春日和の絶好のお天気でしたが、久しぶりの草花コースで距離感が合わず、思わぬ苦戦を強いられました。

さて結果は堀選手が優勝、準優勝に井下選手、第3位が小山選手と実力者が上位を占めました。また、北爪愛子選手がゲスト優勝に輝きました。

肝心のMVPはライバルが崩れる中、準優勝の井下選手が初の栄冠を手にする事に成りました。

優勝	堀 重和	Net 86 (Gross 91)
準優勝	井下 佳弘	Net 88 (Gross 103)
第3位	小山 悦雄	Net 89 (Gross 92)
LD賞	井下 佳弘	160Y (No. 7)
	高松 秀男	234Y (No.18)
NP賞	井下 佳弘	14m (No. 8 143Y)



☆☆ 優勝おめでとうございます ☆☆
優勝の堀選手（左側）

ゲスト優勝の北爪愛子選手

		OUT	IN	Gross	HDCP	NET	順位
第1組	倉地孝一	52	60	112	19	93	
	高松秀男	59	54	113	10	103	
	堀 重和	47	44	91	5	86	優勝
	北爪愛子	57	60	117	33	84	ゲスト優勝
第2組	井下佳弘	50	53	103	15	88	準優勝
	小山悦雄	43	49	92	3	89	第3位
	酒井正人	61	56	117	28	89	
	奥野清則	51	48	99	7	92	



平成 21 年度 MVP 井下選手
(前回優勝のレプリカ贈呈)



第 37 回 Mwe シニア会ゴルフ大会 (夏休みゴルフ祭り)
 日時 2010年7月17日(土)、18日(日)
 場所 ユニオンエースゴルフクラブ(秩父市)

Mwe シニア会ゴルフ同好会便り

第37回 Mwe シニア会ゴルフ大会は、昨年に引き続き、緑あふれる秩父のユニオンエースGCで、1泊2日の日程で開催されました。ちょうど梅雨も明け、久しぶりの好天に恵まれ快適なゴルフ日和になりました。

当日は3連休の初日で、関越道の渋滞に巻き込まれた北爪号が大幅な遅刻となったため、やむを得ず初日を夏休みゴルフ大会に切り換えました。

結果は優勝が堀選手で、遅れて参加された北爪愛子選手は皆様と別コースを回ったため、好成績でしたが惜しくも幻の優勝となってしまいました。

さて翌日の Mwe シニア会ゴルフ大会は、久しぶりに参戦されました武田選手が優勝、谷口道子選手が準優勝に輝きました。武田選手は前日も準優勝で実力を発揮されました。強い夏の日差しに少々バテ気味でしたが、無事に2日間の大会を終え、渋滞の高速で帰途に着きました。

第37回 Mwe シニア会ゴルフ大会

優勝	武田 茂	Net 74 (Gross 91)
準優勝	谷口 道子	Net 77 (Gross 98)
第3位	小山 悦雄	Net 78 (Gross 86)

LD賞	奥野 清則	(東 No. 3)
	堀 重和	(西 No. 9)
NP賞	柴富 昭洋	(東 No. 8 155Y)
	谷口 光洋	(西 No. 4 186Y)

夏休みゴルフ大会

優勝	堀 重和	Net 74 (Gross 83)
準優勝	武田 茂	Net 81 (Gross 98)
第3位	小山 悦雄	Net 82 (Gross 90)



Mwe シニア会ゴルフ大会
優勝の武田選手 (右側)

☆☆ おめでとうございます ☆☆



夏休みゴルフ大会優勝の堀選手

☆☆ おめでとうございます ☆☆



平成21年度MVP 井下選手

堀会長より記念の楯を授与

第 37 回 Mwe シニア会ゴルフ大会

夏休みゴルフ大会

		東	西	Gross	HDCP	NET	順位
第 1 組	奥野 清則	44	48	92	11	81	
	北爪 進	49	48	97	16	81	
	武田 茂	46	45	91	17	74	優勝
	谷口 道子	50	48	98	21	77	準優勝
第 2 組	小山 悦雄	44	42	86	8	78	第三位
	谷口 光洋	47	44	91	11	80	
	北爪 愛子	55	56	111	33	78	
第 3 組	柴富 昭洋	52	52	104	10	94	
	北條 顯道	46	47	93	10	83	
	堀井 良子	61	54	115	33	82	
第 4 組	井下 佳弘	54	50	104	17	87	
	酒井 正人	55	57	112	28	84	
	堀 重和	43	45	88	9	79	

		南	東	Gross	HDCP	NET	順位
第 1 組	井下 佳弘	55	55	110	17	93	
	小山 悦雄	48	42	90	8	82	第三位
	北條 顯道	47	45	92	10	82	
	谷口 道子	55	50	105	21	84	
第 2 組	武田 茂	49	49	98	17	81	準優勝
	堀 重和	38	45	83	9	74	優勝
	谷口 光洋	50	49	99	11	88	
第 3 組	奥野 清則	48	47	95	11	84	
	柴富 昭洋	51	50	101	10	91	
	酒井 正人	61	56	117	28	89	
第 4 組	北爪 進	54	43	97	16	81	
	北爪 愛子	51	45	96	33	63	幻の優勝
	堀井 良子	54	53	107	33	74	



Mwe シニア会行事の状況と今後の活動計画

★ 総会・講演会・懇親会の企画提案

平成 22 年度 :

- 1 月 30 日 Mwe シニア会新年会 (東横線都立大前駅、レストラン、クエルクス)
- 2 月 13 日 Mwe シニア会懇親会 (東京、五反田、アルパイン本社、トリサク)
- 3 月 10 日～22 日 ネパール旅行 (エベレストを見ながらお茶を！)
- 5 月 03 日 幹事会、アルパイン社本社会議室、
- 6 月 11 日 Mwe シニア会総会、メルパルク TOKYO、6 階、「ル・シェル」
- 9 月 18 日 運営委員会、エイブ・エレクトロニクス・ジャパン社会議室、新横浜
- 10 月 30 日 木下農園と BBQ 大会
- 12 月 07 日～10 日、APMC 2010、Mwe シニア会後夜祭

★ Mwe シニア会ゴルフ同好会

- 第 36 回大会、3 月 13 日 立川国際 CC
- 夏休み大会、 7 月 17 日 秩父ユニオンエース CC
- 第 37 回大会、 7 月 18 日 秩父ユニオンエース CC
- 第 38 回大会、 9 月 11 日 富士宮 GC
- 第 39 回大会、11 月 21 日 小名浜 CC (幹事：奥野、平井、松本、高松)

★ Mwe シニア会囲碁同好会、

平成 22 年度予定 :

- 第 1 回例会 3 月 (於) 菊名囲碁センター
- 第 2 回例会 9 月 (於) 菊名囲碁センター
- 第 3 回例会 11 月 (於) 菊名囲碁センター
- 第 4 回例会 1 月 (於) 菊名囲碁センター (幹事：平井、平野、北爪、)

編集雑感

一足早いハロウィンのお祭りにあやかった賑やかな子供達の訪問があった。ハロウィンは元々はカトリックの聖人や殉教者を記念するお祭りであったが、19 世紀にアメリカ移民によって持ち込まれ、今やアメリカの一大行事となっている。日本のお盆に似通った行事であり、親族の霊をお菓子を頂くことにより天国へ導く約束をすとか。このような謂れは知るよしもなく、年寄り世帯の多くなった閑散とした町内に久し振りに甲高い子供達の賑やかな歓声に包まれた。近所の幼稚園の父兄の有志が予めお願いしていた家庭にお菓子を預けて、子供達の来訪時に手渡しするだけであった。かみさんは預かったお菓子に少し手を加え、お菓子のプレスレットや首飾りに変え、近所の数軒のお年寄りにご協力していただいた。子供達にとってはサプライズハロウィンであった。お菓子を貰う度に、目を輝かせ、“ワー此処もお婆ちゃんだ！”と歓声を連呼。ご協力いただいた近所のお年寄りから、敬老の日の紅白饅頭を頂くよりも、何倍も楽しかったとのお言葉を頂いた。(柴富)



Mwe シニア会 会員の加入状況

Mwe シニア会に 2010 年 10 月末現在、個人会員 61 名、賛助会員 2 名（個人 1、法人 1）となりました。今後とも会員数の拡大に向け皆様のご協力をお願い致します。

会員名簿（五十音順・敬称略）

赤田 邦雄
粟井 郁雄
飯田 明夫
井下 佳弘
石田 修己
石原 浩行
泉 彰
井田 雅夫
伊東 正展
上野 清
海上 重之
大友 元春
大沼 透
岡田 孝夫
奥野 清則
影山 隆雄
春日 義男
風神 裕
片木 孝至
北爪 進
木下 亮英
小谷 範人
清野 幹雄
許 端邦
紅林秀都司
倉知 孝一
小林 禧夫
小山 悦雄
酒井 正人
坂野 泰正
佐藤 軍吉
篠原 己拔
柴富 昭洋
菅田 孝之
鈴木 洋介
関延 正昭
瀬戸口 亨
高木 直
高橋 弘
高松 秀男

武田 茂
田中 淳
田辺 英二
谷口 光洋
遠山 嘉一
百々 仁次郎
鳥塚 英樹
橋本 勉
平井 克己
平野 裕
堀 重和
本間 邦夫
牧本 三夫
松永 誠
松本 巖
三浦 太郎
三島 克彦
水品 静夫
望月 弘
山下 與慶
脇野 喜久男

賛助会員
関 周（個人）
アイ電子（株）（法人）

